

読 解 力 テ ス ト

（試験時間 4 0 分）

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
2. この問題冊子には読解力テストの問題が記載されています。万一、落丁、

乱丁があった場合は、手をあげて申し出てください。
3. 受験票、HB または B の黒鉛筆、鉛筆キャップ、シャープペンシル、

消しゴム、鉛筆けずり、時計、メガネ、ハンカチ、目薬、ティッシュペーパー

（袋または箱から中身だけを取り出したもの）以外は机の上に置かないでください。
4. 監督者の指示に従い、解答用紙に志望学科、受験番号、氏名を記入して

ください。誤って記入した場合は、採点できないことがあります。
5. 試験終了の合図で解答を終了し、監督者の指示があるまで席を立たない

でください。また問題冊子は持ち帰ってください。

問題 次の文章を読んで、後の問い（問1～問9）に答えよ。

私たちは知り合った相手が酒好きと判つたとき、よく日本酒ですかそれとも洋酒ですかなどと訊ねたりしますね。言うまでもなく日本酒とは日本古来の米の酒のことで、洋酒とは明治以降西洋諸国から新しく入ってきたウイスキーやブランデー、そしてコニャックなどを指すのが一般のようです。洋酒とはもちろん西洋酒の省略です（それならばビールやワインも洋酒かという、何故か普通はそうは言わないようですが、今はこのような細かい点には深入りしません）。

ところが西洋の酒など一般の日本人が日常生活で飲むことは勿論、見たことさえなかった時代には、人々が飲む酒は当然今で言う日本酒に限られていたはずで、ですからこのように米で造った日本の酒だけしかないときには、それをわざわざ日本酒と必要がないのですから、日本酒という言葉はありませんでした。これが「酒が日本酒しかなかった昔は、言葉としての日本酒がなく、したがって ^A誰も日本酒なんて飲まなかった」わけです。

このように以前からずーつとあったものが、ある時点で何かこれと密接に関係し対応する別の似たものが現れてきたために、改めてそれとの関連で新しい名で呼ばれるようになる、つまり再命名されるという現象は、新語の誕生の一つと考えることができます。言葉というものはこのように、新しくあるものが生まれたり、またはそれ自体が少しも変化したりしなくても、そのものと他者との関係が変わるだけで新しく生まれるものなのです。

この日本酒と全く同じ仕組による新しい言葉が、明治以来日本語には数多く生まれました。日本茶、日本食、日本人形、日本間、日本舞踊、日本髪、日本画、日本紙、日本音楽、日本文学、日本犬などいくらでも挙げることができます。これらは皆外国から新しく入ってきた同類のものが、大きな意味では在来のものに対応するけど、それでも色々な点で違うので、それらと区別対比させるために改めて「日本」をつけたのです。ですから日本語にはいまでも日本人形―西洋人形、日本音楽―西洋音楽のように西洋と対をなす日本の付いた言葉が沢山あります。

この対語的に用いられた西洋は、多くの場合〈西〉を省いてただの洋として洋食、洋服、洋間、洋犬、洋画などの言葉を作っています。そして日本の方も単に〈日〉と **b** されて日舞（日本舞踊）などの言葉を生んでいます。洋との対語としてはむしろ和食、和菓子、和服、和室、和紙、そして邦画、邦楽といった具合に和や邦のほうがよく用いられているようです。

ア このように、あるものや事柄それ自体は以前からちゃんと存在しているのに、それを **c** 言葉がないという現象は、その気になって考えてみると実はわれわれの身の周りに結構ある事に気がきます。たとえばいま野球の放送を聴いていると、しばしば「逆転負け」という表現を耳にしますが、しかし私のような年寄りにはこの言い方がとても面白く感じられるのです。それと言うのも以前は「逆転勝ち」とは言っても、「逆転負け」という言い方はなかったからです。誰もが負けると思っていたチームが土壇場で試合の流れを逆転させて勝ったときの、観客が受けた意外な驚きを、このチームは「逆転勝ち」したのだという言い方で強調することはあっても、負けた相手のチームを形容する言葉は特になかったのです。

それが戦後になって野球の人氣が高まると共に、色々な新しい表現が生まれましたが「逆転負け」もその一つで、これは試合が最後になって突然迎えた意外な結末に、それまで勝つと誰もが思っていたチーム、 **イ** 予想に反して敗者となった側の人々が抱いた、「何とも残念、惜しかった、悔しかった」という気持ちを表現した新しい言葉なのです。

今から半世紀ちよつと前、私がまだ大学在学中に戦後日本の教育制度が大きく変わり、それまでの古い大学は新しいタイプの大学に取って代わられることになりました。とは言っても古い大学の学生が残っている限り、それを直ぐ無くすわけにもいかないのです、何年かの間は新旧二つの違ったしくみの大学は併存することとなりました。そこでこの二種の大学を区別する必要から、「大学といっても新制のほうです」とか、「いや私は旧制です」のような会話がしばしば聞かれるようになりました。

これはまさに日本酒の場合と同じく、旧制大学しかなかったときは旧制大学という言葉がなくて、それと対比される新制大学が生まれて初めて旧制大学という呼称が生まれたわけです。 **ウ**

このような教育制度の移行期において新旧二つを区別する必要から生まれた呼び名は、やがて対比される古い大学が完全に姿を消して全ての大学が新制となると、新制大学も旧制大学も言葉としてはどち

らも聞かれなくなり、大学はすべて皆ただの大学に戻りました。

教育の話のついでに、戦後導入された男女共学に関しても同じようなことがあります。今日本ではあらゆる教育の場で男女共学は珍しくありませんが、戦争前は一部の小学校で実験として低学年のクラスに男女組という共学が見られただけで、学校はどこでも男女を隔離するのが一般的でした。ですから当然男女別学という言葉はありませんでした。ここでも事実があるのにそれが当たり前であるために、特にそれと呼ぶ言葉がないという命名の一般則が見られます。そして今では男女共学が原則となった教育の場で、私立では男女別学が多く見られるなどと言われるのです。

大分前のことですが、ある女子大学の卒業生名簿を見て面白く気が付きました。なんと卒業生の氏名がかつての在学当時のままの姓名で出ているのです。これを読んで「当たり前じゃないか、どこが面白いのか」と思うのは男の人です。今の日本では殆ど^{ほとんど}の男子は養子にでも行かない限り、結婚しても姓が変わることはないのです、在学当時の姓名で編集した卒業生名簿でも、昔の友人を探すことができるからです。

ところが女子の場合、大半の人は結婚して姓が変わってしまうので、現在の姓で名簿を作られると、自分の昔の知り合いを探すことは

X となってしまうのです。そこで名簿は昔の姓名で編集して、結婚などで姓が変わった人はこれを新姓として、もとの姓の後ろに付記する方法が取られているのです。この新姓という言葉は以前からあった旧姓を踏まえて作られた新語で、このやり方は、女性が名簿でかつての同級生の住所や消息などを知ろうとする時は本当に便利だと思います。私が調べた限りではまだこの新姓という語を採録している国語辞典はないようです。私は格別フェミニストではありませんが、この便利な新語を是非早く正式の日本語に加えるべきだと思います。

気が付いてみると近頃普通列車の呼び名としての〈鈍行〉という言葉はあまり耳にしくなつたと思います。この〈鈍行〉は〈急行〉や〈準急〉などの正式名称とはちがう民衆造語とでも言うべきもので、国民一般の経済状態がまだよくなかつた時代では、割高な急行料金を払う余裕のない学生などが、時間がかかり座席も固い普通列車で遠距離を旅するときなど、ユーモラスでどこことなく自嘲の響きもある、この急行をもじつた〈鈍行〉を使ったものでした。〈鈍行〉とは何の変哲もない普通列車に違つた光を当てることで、冷たい現実をどこことなく

暖かくする効果を狙った言葉だと思っています。

新語の生成を改めて検討してみると、^B生まれた後にこれらの言葉の辿る道は様々であることがわかります。新制大学という呼び名はそれと区別すべき旧制大学が完全になくなると、その言葉自体も消滅してしまいました。しかし逆転負けという新しい言い方は元からある逆転勝ちと並んで、立派な用語としての地位を確保しています。そのわけは、この語がある一つの現象、つまりスポーツの試合の結果について、これまでなかった見方、新しい視点を加えたものだからです。表現者が勝者敗者のどちら側に立って結果を見ているかを明らかにしたわけです。だからこの二つは両立する言い方なのです。

はじめに取り上げた日本と西洋の場合はどうでしょうか。日本語のなかにこのような日本という語彙が増えだしたのは言うまでもなく明治以来、欧米諸国、つまり当時の言い方での西洋から珍しい事物が次々と輸入されたことがその原因です。しかし海外から持ち込まれた事物に、日本国内に対応するものが全く見あたらなかったときは、多くの場合新しいものと一緒に、そのものを指す外国語名もそのまま取り入れられたのです。パン、バター、そしてチーズなどがいい例で、はじめは何とか日本語で言い表そうとする努力が色々となされたのですが、結局は外国語名そのものが、外来語として日本語の中に加えられることになりました。

酒や人形の場合は、新しく輸入されたものにほぼ相当するものが以前から日本国内にありながら、両者は様々な点で全く同じとは言えず、扱いや性質もかなり違ったために、外国渡来ものを西洋酒とか西洋人形と呼んで、在来の対応物と区別したわけです。

しかしここで、問題があります。一般にどの国どの言語でも外国から渡来した新奇な事物は、渡来元の（と考えられた）地名をつけて旧来の土着物と区別するものです。日本で以前よく耳にした朝鮮人参、インド更紗、そして古くは紅（呉の藍）、唐芋、唐きび、ジャガ（タラ）芋などがそれです。しかしだからと言ってその際それまであった在来の対応物のことを、改めて日本と呼び直すことは起こりませんでした。

日本と同じくイギリスでも、これまで隣国のフランスから数々の新奇な事物を取り入れています。その結果として英語のなかにはフレンチという、渡来元の呼び名をかぶせた沢山の言葉があります。フレンチ・ウィンドー、フレンチ・トースト、フレンチ・キス、フレンチ・リーブ

などどんどん出てきますね。しかしだからと言って英国では在来のをイングリッシュ・ウインドー、それまでの普通のトーストをイングリッシュ・トーストなどと改めて呼び直したりはしませんでした。この点はロシアでも同じで、日本の着物のことは日本を意味するヤポンスコエをつけてヤポンスコエ・プラーチエといいますが、在来のロシアの衣服はプラーチエのままです。それなのに明治以後の日本だけは外国渡来のものに〈西洋〉を被せただけに止まらず、対応する在来の事物にも改めて〈日本〉を付ける、つまり在来の事物を再命名することを行っているのです。これはどうしてでしょうか。

私の考えたこの珍しい現象の謎解きは次のようなものです。明治以後の日本は世界でも稀な二文化 あ の社会となつたからです。考えてみれば直ぐわかりますが、私たちは日常生活や社会のあらゆる面において、常に西洋的な外来文化要素と在来の日本的なもののどちらかを選択する必要に迫られてきたのです。酒のことは前に説明しましたが、「音楽が好きです」といえば「洋楽ですか邦楽ですか」と聞かれますし、大分前のことですが私の母は父が外出すると言うと、必ず「和服になさいますか、洋服ですか」と訊ねていました。どちらにするかによつて準備に大変な違いがあるからです。いまでも客に出すお菓子を和菓子にするか洋菓子にするかで、お皿から茶碗ちやわん、そしてお茶そのものまでまったく別になるのが普通です。

これに比べて諸外国では日常の生活の基本は衣食住の全てにおいて、いまでも殆ど従来からの自国のものだけで占められていて、時々何かの折に外国渡来のものが顔を出すだけです。ですからこの言わば特別なときだけそれに渡来元の国名をつけて、在来のものではないことを示せばよいのです。

しかしこのようにたまにはなく、日常毎日の生活のあらゆるところで日本風か外国式かを選ぶことを迫られた近代日本人は、日本（西）洋々（西）かを常に意識して使う必要があつたのです。この傾向は（例えば和服と洋服のバランスが崩れた現代では）たしかに以前より弱まってきましたが、それでも他の国々の場合に比べると、まったく異なる東西二文化、いや時には中華を加えた三文化が相互に溶け合わず独立して あ の状態にある日本の社会状況は、世界的に見てかなり突出したものなのです。

私は外国で日本文化について講演をする際に、息抜きに、なぜ日本の家庭の台所が、アメリカやフランスの家庭のように綺麗きれいに片付いて

いることが少ないのかの話題によく触れました。その理由の大きなものとしてまず伝統的な日本の飲食関係の道具類の複雑多様なことが挙げられます。お茶一つとっても番茶、煎茶、玉露で茶碗を初めとする道具類がそれぞれ違います。お皿や器も食べ物の種類、大きさ、形や色の違いに応じて色々と揃えてありますし、これらは季節によっても変化します。これだけでも欧米のすつきりと画一で規格化された食器のセットと比べると大変に複雑ですが、そこに西洋式の食器がティーセットをはじめとして色々と加わっている家が普通です。日本人は少し前までは全てを箸だけで食べていたのに、今ではナイフ、フォーク、スプーンのような、ものを食べるためのいろいろな道具類も引き出しをぎつしりと埋めています。しかもそのうえ家によつては、更に中華料理の道具一式まで揃えてあるといった具合ですから、日本の台所は様々な異なつた食事文化が **あ** し、それらの複合状態に置かれているのです。これではなかなかすつきりとは片付かないのも道理です。

「このようなわけですから（日本酒）といった言葉の由来一つでも、実は日本の文化のあり方が複数の異質な要素が交じり合い渾然と溶け合つた雑種状態というよりは、それぞれ性質を異にしたいくつかの文化要素が、状況に応じて入れ替り立ち代り現れるという極めて特殊な多種 **あ** 性を持っているという事実を抜きには論じられないことがこれでお分かりだと思います。私の言語学が終始一貫して言葉と文化の密接な関連を強調してきたわけもここにあるのです。」

（鈴木孝夫『日本語教のすすめ』による）

問1

空欄

a

c

に入る言葉の組合せとして最も適切なものを、次の1～6の中から一つ選べ。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|----|---|-----------|
| 1 | a | 言う | b | 断絶 | c | あえて呼ぶ |
| 2 | a | 名乗る | b | 省略 | c | 明確に否定する |
| 3 | a | 断る | b | 短縮 | c | 取り立てて言う |
| 4 | a | 伝える | b | 限定 | c | 特別に贈る |
| 5 | a | 呼ぶ | b | 割愛 | c | あいまいに定義する |
| 6 | a | 称する | b | 区分 | c | わざわざ名付ける |

問2

傍線部A「誰も日本酒なんて飲まなかった」とあるが、この理由として最も適切なものを、次の1～6の中から一つ選べ。

- 1 西洋諸国から入ってきた新種の酒が新鮮に思われて、日本酒の価値が一時的に洋酒を下回ったから。
- 2 日本の米を原材料とする酒は多くの洋酒に比べて体に優しいが、一癖あり、好き嫌いが分かれていたから。
- 3 日本で豊富にとれる米を使った酒なので、大衆的になり過ぎて、それ自体の価値が下がったから。
- 4 西洋の酒が日本に入ってくるようになり、もともとあった酒は日本酒と呼ばれなくなったから。
- 5 米を原材料とする日本酒は古くから世界で珍重されていたため、誰もが飲めるほど安価ではなかったから。
- 6 多くの人が米で造った酒を飲んでいたが、それは単に酒と認識されており、日本酒とは呼ばなかったから。

問3 空欄

ア

}

ウ

 に入る語の組合せとして最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選べ。

- | | | | | | |
|---|--------|--|---------|--|-----------|
| 1 | ア さて | | イ たとえば | | ウ ともかく |
| 2 | ア ところで | | イ つまり | | ウ ところが |
| 3 | ア すると | | イ それゆえに | | ウ にもかかわらず |
| 4 | ア では | | イ しかし | | ウ なぜなら |
| 5 | ア そして | | イ それでいて | | ウ と言うのも |

問4 空欄

X

 に入る言葉として最も適切なものを、次の1～6の中から一つ選べ。

- | | |
|---|----------------------------------|
| 1 | 砂上の楼閣 |
| 2 | 漁夫の利 |
| 3 | 冰山の一角 |
| 4 | 象牙の塔 |
| 5 | 至難の業
<small>こうや しろはかま</small> |
| 6 | 紺屋の白袴 |

問5 傍線部B「生まれた後にこれらの言葉の辿る道」について、本文の説明に合致するものを、次の1～5の中から一つ選べ。

- 1 「旧姓」を踏まえて作られた「新姓」は、かつての同級生の住所や消息などを知ろうとするときは本当に便利なので、フェミニストが国語辞典に掲載するように求めている。
- 2 時間がかかり座席も固い普通列車で遠距離を旅する様を表す「鈍行」は、「急行」をもじって作られた民衆造語で、現在では鉄道会社でも公式に採用されている。
- 3 戦後にできた大学と古い大学とを区別するために作られた「新制大学」と「旧制大学」の呼称とは、古い大学が姿を消すにつれ、「新制大学」に統一された。
- 4 「逆転勝ち」という用語から派生してできた、誰もが勝つと思っていたチームや選手が土壇場で試合の流れを変えられて負けてしまったことを表す「逆転負け」は、立派な用語となって今も残っている。
- 5 東洋諸国から入ってきたウイスキーなどの「洋酒」と区別するために日本古来の米の酒を「日本酒」と呼ぶようになり、現在も定着している。

問6 傍線部C「問題」とはどのようなものか。最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選べ。

- 1 なぜイギリスにはフランスから数々の新奇な事物が取り入れられているのかという問題。
- 2 なぜどの国でも外国から渡来した新奇な事物を旧来の土着物と区別するのかという問題。
- 3 なぜ日本では朝鮮人参に対比して在来ものを日本人参と呼び直さなかったのかという問題。
- 4 なぜロシアでは日本の着物をヤポンスコエ・プラーチエと呼び、在来の衣服と区別したのかという問題。
- 5 なぜ明治以後の日本でのみ在来の事物の名前にも改めて「日本」を付け加えたのかという問題。

問7 本文中に四箇所ある空欄 あ に共通して入る言葉として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選べ。

- 1 統合
- 2 協同
- 3 融合
- 4 併存
- 5 競合

問8 本文の内容と合致するものを、次の1～6の中から一つ選べ。

- 1 在来のもものが別のものと相互に溶け合い、新しいものが誕生すると、対応する新しい言葉が生まれる。
- 2 日本を表す言葉には、〈日本〉の他に、単に〈日〉と短縮されたもの、〈和〉や〈倭^わ〉を付けたものがある。
- 3 勝者の側の「逆転勝ち」という言葉は、敗者の側の気持ちを表す「逆転負け」から生まれたものである。
- 4 和服よりも洋服中心になった現在の日本人も、依然として日本風か外国式かを常に意識して呼び分ける傾向にある。
- 5 自国のもの中心で成り立つ諸外国には他国由来のものは少なく、ことさらにそれに国名を付けることはない。
- 6 新たに入ってきた事物との区別のために、在来の事物の呼称に特定の要素を加えることで、新語が誕生することもある。

問9 時代の流れとともに生成し、後に消滅した新語として、本文で挙げられている言葉の中から一つを抜き書きせよ。